

入試年度	2025	入試方式	一般（秋季）	課程	博士前期
研究科	文学	専攻	国文学	領域（分野）	
出題のねらい					
<p>大問【一】  源家長『源家長日記』から出題した。大学院博士前期課程で学ぶにあたって必要な古典文学史・和歌文学史・和歌修辞の知識を持っていること、主語や対象を正しく理解しながら文章・和歌を読解する力を持っていることを確認することを目的としている。</p>					
解答・解答例または採点時の評価ポイント					
<p>大問【一】  問一 1、藤原俊成 2、千載和歌集  問二 いまにも死を迎えようとしている俊成の命。  問三 小篠のこの一節ならぬ、我が子の（昇進という）一件を気がかりなこととして心に残していることだ。  問四 俊成の息子である定家が、中將に昇進するという願いが遂げられた。  問五 貫之歌は別れ別れになる心細さを詠んだものである。貫之歌を引用することによって、生き別れとなることでさえも貫之が詠んだように心細いものなのに、ましてや俊成とは死に別れてしまったのだから、よりいっそう心細いという心情を表現している。  問六 この『新古今和歌集』が最終的に完成したものを俊成に見せ申し上げなかったことが心残りとなって、俊成が死出の山路を簡単にはお越えになっていないだろう（簡単には死ぬことがおできにならないだろう）。</p>					

入試年度	2025	入試方式	一般	課程	博士前期
研究科	文学	専攻	国文学	領域(分野)	
出題のねらい					
<p>大問【二】  基本的な同一の説話を取り上げた、中世と近世の作品から出題、古典あるいは和歌を解釈する力を試す(問一)のを皮切りに、翻字の基礎的能力の有無を確認する(問二)とともに、作品本文の解釈を基盤としながら各作品の意図を把握する力を試験し(問三)、加えて、文学史に関する知識・理解のあり方をも問うた(問四)。</p>					
解答・解答例または採点時の評価ポイント					
<p>大問【二】  問一 「しか」は、「然」と「鹿」の掛詞。「人」は、「男」(夫)を指す。鹿が泣くのと、以前は夫が泣いて自分を恋慕ったこととを、重ね合わせる。そして、その以前の状況と対比して、「今」を嘆く。「こそ…聞け(已然形)」は、下に逆接の関係で続く形。「私もかつては、その鹿が鳴くように泣いてあなたに恋慕われたものです。今ではあなたの声だけをよそで聞いている有様ですが」という意。  問二 あるおとこ、秋の夜のつれくとなかきに、しかの声、枕にをとつるゝとき、本のめに、きゝたまへやと云ければ、よめる。  我もしかきてそ人に恋られし今こそよそにこゑをのみ聞けとよみ侍れば、おとこ、かきりなくやさしくあはれに思ひて、今のめをおくりて、本のめとすみにけり。  問三 『古今和歌集』の注釈書であるAは、『古今和歌集』仮名序が、和歌の効能の一つとして、「おとこ女のなかをもやはらぐる(夫婦の仲を和らげる)」というのを挙げる、それを証拠立てる実例として、「我もしか」歌を含んだ話を取り上げている。一方、賢女の逸話を集めたBでは、夫の浮気に対して賢明に振る舞い夫の愛情を取り戻した女性の話として、「我もしか」歌を含んだ話を取り上げている。  問四 江戸時代初頭の約八十年間に行われた散文文芸の総称。教訓的、娯楽的なものから実的なものまで雑多の内容を含み、庶民向けの読み物として出版された。中世の小説と本格的な近世小説の浮世草子との過渡的な存在。代表的作家としては、『浮世物語』の浅井了意、『因果物語』の鈴木正三など。</p>					

入試年度	2025	入試方式	一般（秋季）	課程	博士前期
研究科	文学	専攻	国文学	領域（分野）	

出題のねらい

大問【三】

中山弘明『〈学問史〉としての近代文学研究』（ひつじ書房、2024年5月）より、昭和初年代から執筆された、批評家神崎清（かんざききよし 一九〇四～一九七九）が当時の若き女性たちにあてて記した『少女文学教室』（実業之日本社、一九三九・三）を紹介している部分から出題した。

『少女文学教室』は、当時の女学校で学ぶ女学生たちに留まらず、女学校に進学する機会を得られずに働きながら教養を高めることを目指した女性たちをも対象とした近代文学研究の入門書である。現代の大学院で研究を志す女子学生の方々に、同年代の女性たちを対象とした、近代文学研究史の初期に位置する同書を紹介する文章を通して、近代文学研究の歴史の一端に触れ、研究史を整理することや資料を博捜することの意義、「文学の人生的な意義」、「文学と社会とのつながり」などについてあらためて意識してもらうことを意図して出題した。

問一（漢字の読み）・問三（漢字の書き取り）については、今後多くの文献を読み、論文を執筆するにあたり、必要となる語彙力を試している。特に問三は、問題文の文脈を正確に把握し、それに合致する適切な語を想起できるかという、読解力をも試している。

問二は、単に「博捜」という言葉についての知識を問うだけではなく、大学院に入学後は自らも実践することになるこの語が表している行為の意義を、問題文に記されている神崎清の活動の特徴を正確に捉えつつ、説明できるか否かを試すものである。

問四は、問題文の内容把握に留まらず、それと設問文にある情報とを組み合わせた時に何が見えてくるのかという、複数の情報を総合して考察・論述する力を試している。

問五は、問題文中に名前が登場する島崎藤村の文学活動について述べてもらう問題で、大学院で研究を展開するうえで必要となる、文学史的な知識が身につけているかどうかを試すものである。

問六は、明治20年代初頭に「婦女の鑑」を発表した、女性作家木村曙の文学の「現代的意義」を説明する問題である。問題文中の各所に点在している複数の情報を的確に収集し、それらを総合して考察することができるかという、思考力を試している。問七も同趣の問題である。

問八は、文脈を捉え、それに合致する慣用句を挿入する問題で、読解力と語彙力とを同時に試している。

解答・解答例または採点時の評価ポイント

大問【三】

〈採点時の評価のポイント〉

問二は、大学や専門学校での卒論執筆にも応えうるだけの豊富な参考資料が広く集められている、ということを書きだけでなく、神崎のこの書に於ける参考資料博捜の要点の一つである、学校に在籍していない人々をも利用者として想定している、という点を解答に盛り込み、問題文中の「唯一の文学教室」「自由に利用できる文学図書館」という言葉に込められた意味を、説明できているか否かがポイントとなる。

問四は、この書の読者層の一部として想定されている当時の女学生について、神崎に『少女文学教室』の執筆を依頼した雑誌『少女の友』の性格にも触れながら設問文で説明を加えているので、その内容と問題文とを照らし合わせた時に見えてくる意義について論述してもらう問題である。問題文にある「女学生に新しい刺激と緊張をもたらす」といった『少女文学教室』の目標、「文学と社会とのつながり」をつよく意識して書かれた」という特色が、設問文で示した情報（『少女の友』に掲載されていたような少女小説に見られる、女学生たちが生きる閉鎖的とも言える空間）と照らし合わせた時にどういう意味を帯びるか、ということが説明できていることが求められる。

問五については、島崎藤村の文学活動は数十年に及ぶが、設問では細かい指定をしていないので、ある特定の時期（例えば初期の『若菜集』に代表される浪漫主義の詩人としての活動、その後小説に転じてからの『破戒』に代表される自然主義作家としての活動など）に絞って論述してもよい。

問六は、明治20年代の初めに発表された木村曙の作品の性質を傍線部の前後から捉え、その「現代的意義」を説明するというもので、まずはここで言われている「現代」とはいつか（神崎が『少女文学教室』を執筆した時期）を明確に捉える必要がある。次にその時代に生きる女性たちについての情報を問題文の前半部から集め、木村曙「婦女の鑑」の内容と照らし合わせて説明することができているかがポイントとなる。

問七は、傍線部の後にある、漱石作品の「社会に対する闘争的身構へ」の強調から、社会に対して文学がどうあるべきかということについての神崎の理念を読み取り、さらにそれと、この神崎の文章がもともとは「支那事変下」に執筆されたものであるという情報とを組み合わせ、そこに込められた意味を論述できているかがポイントである。日本史・世界史の知識も必要となる。また「簡潔に」と指定しているので、問題文の諸情報から神崎の社会に対する姿勢を汲み取り、自分の言葉に置き換えて要領よく説明することが求められる。

入試年度	2025	入試方式	一般（秋季）	課程	博士前期
研究科	文学	専攻	国文学	領域（分野）	
出題のねらい					
<p>大問【四】  国語学の領域から、過去の歴史に関する知識・理解を評価する問題と現代語に関する知識・理解を評価する問題とを出題しました。ともに、私たちの国語について考えるに際して、欠いてはならない事柄です。</p>					
解答・解答例または採点時の評価ポイント					
<p>大問【四】  問一①「上代特殊仮名遣」については、まず、その研究史に触れ事実の概要を述べたのち、「仮名遣」の問題が、古代日本語の音韻の解明に繋がることを説明する必要があります。  ②「係り結び」については、まず「係り結び」の法則をはじめとする事実の説明ののち、その歴史についても触れる必要があります。  問二①「単綴語と複綴語」については、まず、「単綴形態素」「福鉄形態素」について触れたのち、それぞれをどのように用いるかによって「単綴語」「複綴後」に分類されること、そして、それぞれの代表言語を例として挙げる必要があります。  ②「コソアド語彙」については、まず、日本語の指示語の体系性について触れ、「こ」「そ」「あ」「ど」を用いた指示語がどのように用いられるか、特に「そ」系の指示語の使い方については詳説する必要があります。</p>					

入試年度	2025	入試方式	一般（秋季）	課程	博士前期
研究科	文学	専攻	国文学	領域（分野）	
出題のねらい					
<p>大問【五】          大学院において漢文学に限らず国語国文学の研究を進めるにあたって、最低限必要となる漢文に関する基礎知識（語彙、漢詩、文学史、古典常識）や基本的な能力（訓読など）、さらには読解力などを見るための問題を出した。</p>					
解答・解答例または採点時の評価ポイント					
<p>大問【五】          問一 兼通が兼明を比叡山（延暦寺）に閉じ込めたので、兼明は亀山に行くことができなかった。          問二 扶桑 豈に影無からんや、浮雲 掩ひて乍ちに昏し。          叢蘭 豈に芳しからざらんや（芳はざらんや）、秋風 吹きて先づ敗る。          問三 一条天皇が伊陟に、「父君が残し詩文は、何巻あるのか」とたずねた。伊陟は、「遺作は散逸してしまい、ただうさぎの皮衣だけがあります」と答えた。天皇は、親王が着ていた皮衣のことだと思った。          問四 初めて伊陟の菟と兔とを弁ぜざるを覚るなり          問五 一条天皇自筆の兼明親王の「菟裘賦」の対句が他人に見られると、天皇が道長の専横に対して不満を持っていたことが知られてしまうので、破り捨てて見せなかった。          問六 『和漢朗詠集』は、十一世紀初頭、藤原公任が編纂した中国と日本の詩文の秀句と秀歌を集めた。上巻が四季、下巻が雑の部で、各題の下に、中国詩文の秀句、日本の秀句、和歌の順に挙げられている。構成は中国の類書よりも、四季を重視する『古今和歌集』などの歌集に近い。題ごと巻ごと、さらに全体として綿密な配列意識が見られ、すべてが朗詠に適した秀句というわけではない。中国詩文では白居易が最多で、先行する『千載佳句』よりも割合が増えている。和歌、作り物語、歴史物語、軍記物語や謡曲など、諸ジャンルの文学作品に大きな影響を与えた。「君が代」が国歌とされたのも『朗詠集』の受容史上に位置づけられる。          『本朝文粹』は、十一世紀中頃、藤原明衡が編纂した、嵯峨朝以降の平安時代の漢文の名詩文集。書名は宋の姚鉉の『唐文粹』に倣い、分類は『文選』に倣って三十九項。詩は少なく、散文が多い。詔・勅書・意見封事・対策・表・奏状・書状・序など文体ごとに分類する。祭文・祝願・表白・願文・諷誦文などを含む。基本的に四六駢儷体で対句を多用する。主な作者は、菅原道真・三善清行・紀長谷雄・都良香・大江朝綱・菅原文時・源順・慶滋保胤・兼明親王・紀齊名・大江匡衡・大江以言など。後世の文章家の模範となった。          （具体的な作品との関係を詳しく書いてもよい）</p>					